



筑紫女学園大学リポジット

“Archaeology” and Its Translated Technical Term in Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/50

外来語「アルケオロジー」再考

—用語「考古学」発現初期の様相—

大 津 忠 彦

“Archaeology” and Its Translated Technical Term in Japanese

Tadahiko OHTSU

はじめに

考古学は「遺物により人類の過去の文化を研究する学問」（水野、小林 1959年）と定義されるように、基本的には人類史を復元・考察する歴史学である。したがって、畢竟、研究は土器や石器といった狭義の出土品「遺物」や、貝塚、住居址あるいは「甕棺墓」といったいわゆる遺構がその主たる対象となる。歴史学であるからには、その研究対象物が何時代の、すなわち今から何年前の帰属品であるかは基本的に重要事項となる。そして、そこに客観性を担保するためには、資料の信憑性いわゆる「一級資料」であることが必須となり、真の考古学は腐心し意を注ぐ。ここで云う「一級資料」とは、考古学研究者が考古学的調査により研究資料化した広義の遺物の意味である。

しかし、前記のことは「こんにちの考古学、日本においては1945年以降についてである」とでも言うべきただし書きが付くのであり、我が国におけるさきの大戦前のような特定の史観の時代、あるいはいわゆる「科学的精神」の普遍化する時代以前においては、ずいぶんと状況が異なる。つまり、資料（史料）解釈の時代的相違を提示しているのであり、歴史学における資料（史料）解釈学的要素を捉えれば、考古学にあってもここにその学史の有意性を見出すことができると考えられよう。

I. 用語「考古学」はどのように使われ始めたか

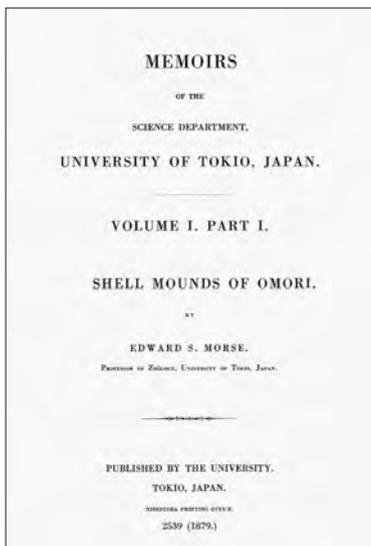
i. *Shell Mounds of Omori* (1879) / 『大森介墟古物編』 (1879)

JR京浜東北線大森駅（東京）ホームには、「日本考古学発祥の地」と記す石碑が建っている。これはアメリカの動物学者 E. モース (Morse, 1838 ~ 1925年) による、1877 (明治10) 年の大森貝塚発見・発掘より100年を記念する碑として設けられたものである。たしかに、「同年9月モースによる本貝塚の発掘は、日本における石器時代遺跡の最初の学術調査」（水野、小林 1959年）、また、モース自身についても「大森貝塚を発見してこれを発掘、英和両文の《*Shell Mounds of Omori*》《大森介墟古物編》(1879) として発表した。これが日本先史学の序幕となった」（下中 1979年）の評価がある。この《*Shell Mounds of Omori*》とは *Memoirs of Science Department, University of Tokio Japan Volume I Part I* (Preface文末の日付は1879年7月16日) のことであり、この和文版

(「図解」前頁本文の文末には「矢田部良吉 口訳 寺内章明 筆記」とある。1879年12月刊行)《大森介墟古物編》は「理科会粹第一帙上冊」(東京大学法理文学部)として刊行されたものである。そしてまた後年、英文版《Shell Mounds of Omori》が大森貝塚の発見・発掘100周年目(1977年)に現代文訳され、さらにこの補訂改訳版として公刊されたものが岩波文庫所収の現代文普及版ともいふべき『大森貝塚一付 関連史料一』である(近藤、佐原 1983年)。

こんにち一般に最も流布し読書可能なこの現代文版『大森貝塚一付 関連史料一』(近藤・佐原 1983年)においては、用語「考古」・「考古学」がその文中に当然ながら散見される：

- ①「これらの貝塚のどれからも大量の遺物が蒐集されたが、今それらは東京大学の考古学博物館にある。」(11頁)
- ②「われわれ考古学者が、日本先史土器に関するこの研究成果をまとめることが出来たのは、」(13頁)
- ③「日本ほど考古学に関心をもつ人が多い国は」(13頁)
- ④「日本人の考古学の集まりがあつて」(13頁)
- ⑤「人類学・考古学・民族学の学会や学会誌の出現は、」(15頁)
- ⑥「法を定めて考古学的遺物や他の古文物の国外流出を」(18頁)
- ⑦「東京には、日本人だけで構成されている考古学の集まりがあり、定期的に例会を開いている。そして日本人の考古学者は数々の出版物を出し、かなりの精度で石器・土器・容器・銘文その他をえがいている」(18頁)
- ⑧「イギリスのすぐれた考古学者ポーレイズ氏の言葉」(18頁)
- ⑨「大森貝塚の蒐集品は、現在、東京大学の考古学博物館にならべてある。」(20頁)
- [⑩「すぐれた好古家嵯川(式胤)氏の教示によると、」(48頁)]



いまこれらを、1879年12月刊行の『大森介墟古物編』およびこの底本たる《Shell Mounds of Omori》(図1)にあらためて対照すると次のようになる(「」文は『大森介墟古物編』より、《》文は《Shell Mounds of Omori》より引用の意。それぞれは、1967年発行、大森貝塚保存会・中央公論美術出版による『大森貝塚』(西岡 1967年)所収の復

図1. 大森貝塚発掘調査報告書(左：英文版；右：和文版)

刻版に拠った。丸数字は前記の同番号各引用文に対応。):

①「皆本部ノ博物場ニ備ヘリ」

《 and are now in the Archæological Museum of the University of Tokio. 》

②「余カ此篇ノ撰述ニ就テ（中略）実ニ古物学士ノ地位ニ在テ」

《 Archæologists are indebted for this contribution toward a knowledge of the prehistoric pottery of Japan. 》

③「日本ニハ好古家ノ数或ハ他国ヨリ多カラント」

《 there is no other country in the world where so great a number of gentleman interested in Archæology can be found as in Japan. 》

④「其二三学士ノ現ニ東京某処ニ会シテ考究撰述スル者ハ」

《 A native Archæological Society holds its meetings regularly in Tokio, and many of the contributions are of great value. 》

⑤「是ヨリシテ人類学古物学人種学等ノ合社新誌各處ニ起リテ此学愈其面目ヲ新ニスルニ至レリ」

《 a new science, in fact, has sprang into activity, and Societies and journals of Anthropology, Archæology and Ethnology are the results of this wonderful awakening 》

⑥「同国ニ於テハ汲々トシテ此等ノ壚中ニ獲ル所ノ古器ヲ保存スルニ注意シ令ヲ嚴ニシテ一切之ヲ他国ニ輸出スルヲ禁セリ」

《 And now so jealously does she guard her treasures that laws have been enacted prohibiting the exportation of archæological specimens or antiquities of any kind from the country. 》

⑦「東京ニ於テモ有志ノ士合社シ期日ヲ定メ相会シテ古代ノ事物ヲ購究シ且ツニーノ古学家ハ既ニ希世ノ古器石具彫鐫物ヲ精図編纂シテ世ニ公ニスト」

《 With the existence of an Archæological Society in Tokio, consisting exclusively of Japanese, who hold their meetings regularly, and the fact that there have already been a number of works published by native archæologists who have figured with more or less accuracy the stone implements, ancient vessels, inscriptions and the like, 》

⑧「英国ノボルレーズ氏ハ古物学ニ遡キ名士ナリ」

《 an accomplished English archæologist, Mr. Borlase, 》

⑨「(該当箇所に該当邦文なし)」

《 The collections from Omori are now arranged in the Archæological Museum of the Tokio Daigaku 》

[⑩「有名ノ古物家蜷川氏ニ聞ク所ニ拠レハ」]

《 Mr. Ninagawa, the distinguished antiquarian, informs me 》

すなわち現代文において「考古」・「考古学」と表されるべき事項については大概「古物」・「古物学」という言いまわしになっていたことが認められる。このことは、前記⑤にあるように、『大森

介墟古物編』の「総論」初段に著わされたところにより、筆者モースの科学的精神共々、首肯されるであろう：

■「人類及動物ノ本原ニ就テハダヴキン氏ガ著名ナル生物原種論ノータビ世ニ出デテ以来、緒家ノ考フル所盡ク其轍ヲ更メ漸次其力ニヨリ太古人種史ノ真ヲ明ニスルヲ得、是ヨリシテ
アンソロポヂーアルヂヨロヂーエスノロヂー
人類学古物学人種学等ノ合社新誌各處ニ起リテ此学愈其面目ヲ新ニスルニ至レリ」

「考古学」相当語は、1879年12月刊行の『大森介墟古物編』においてArchæology（「アルヂヨロヂー」）の訳語として「古物学」が用いられていたことが確認できる。和文版タイトル「大森介墟古物編」は、したがって現代風には「大森貝塚考古編」という様になるだろうか。なお、「ダヴキン氏ガ著名ナル生物原種論」とは「ダーヴィンの進化論」の意であることは云うまでもない。

モースの云うこのArchæology（「アルヂヨロヂー」）は、しかしながら、大森貝塚発掘の翌年すなわち1878（明治11）の年6月30日に「浅草井生村楼」にて開催されたと伝わるモース講演会において「古物学」ましてや「考古学」という用語で登場しているわけではない。江木高遠（1849～1880年）が通訳を務めたといわれるこの講演内容は『なまいき新聞』第3号（1878[明治11]年7月6日付）収録記事として紹介がある（近藤、佐原 1983年）。ここにおいて「梗概を筆記し」たとするその文中に、「考古学」を意味する表現箇所は「土中より出現せる古器により前世界人種のことを考覈する学問」となっている（近藤、佐原 1983年）。講演においてモースは、はたして「Archæology」という英単語を口述したのだろうか、それとも前記文がその逐語訳文となるような英語表現を発したのだろうか。それとも、モースは「Archæology」と口述したけれども、通訳者が訳語（単語）として「考古学」を知らなかったのか、あるいは、聴衆に「考古学」と伝えてもわからないのでは、と配慮した結果説明的訳となったのか。仮に後者ならば、「古物学」とでも表現すればの確性は不足するも判らないではないであろう等々、現段階では判別し難い。

しかしながら、『なまいき新聞』所収記事に拠れば、講演なかほどにおいてモースは考古学上の基本的時代区分いわゆる「三時期区分法」にさえかなり丁寧な説明で言及しているほどであるから、それぞれの時代を学問的に解説しているその専門度から推して、「Archæology」という語だけに限ってその使用をモースが憚ったとはやや考えにくい。やはり、「土中より出現せる古器により前世界人種のことを考覈する学問」という意識は、通訳者の恣意によると考えられないであろうか。

ii. Notes on Japanese Archæology with Especial Reference to the Stone Age (1879) / 『考古説略』(1879)

『考古説略』は、その表紙が記すところに拠れば「明治十二年六月発兌」、すなわち1879年6月に我が国で発行されたいわゆる考古学概説書である（図2、「緒言」には、同年3月に記した旨が読み取れる）。その内容は「主にヨーロッパの考古学研究や出土遺物を紹介することを目的」とするほかに、「考古学の目的、日本考古学に関する内容」および「日本人種論に関する内容」等により構成されている（平田 2008年）。表紙に有る「編者 出版人」として記された「奥地利国 匈牙利国 公使館属」「ヘンリー、ホン、シーボルト」とは、吉田正春（1852～1921年）が同書「緒言」

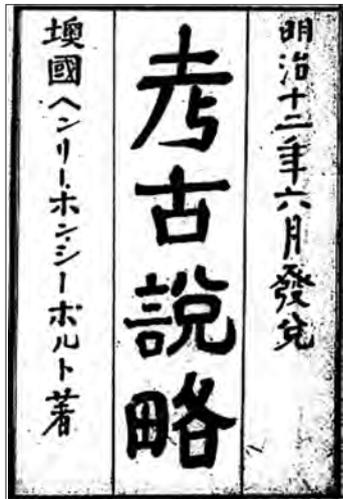


図2. 『考古説略』表紙

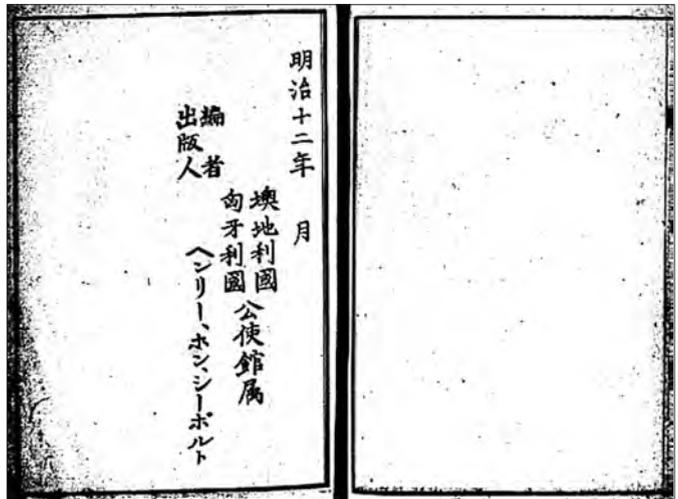


図3. 『考古説略』最終頁

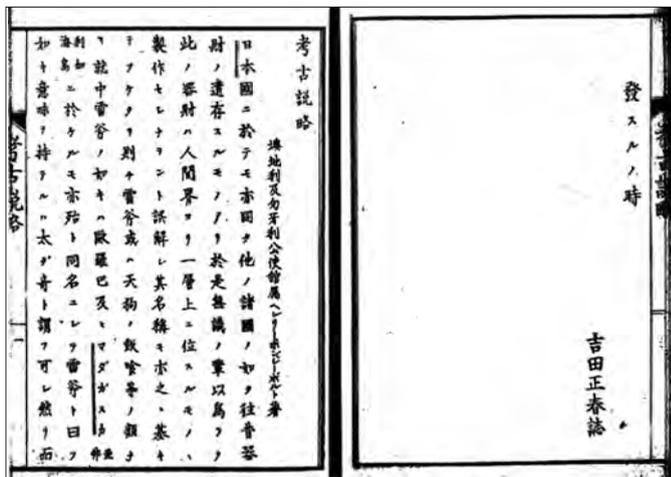


図4. 『考古説略』「緒言」最終頁(右)と次頁(左)

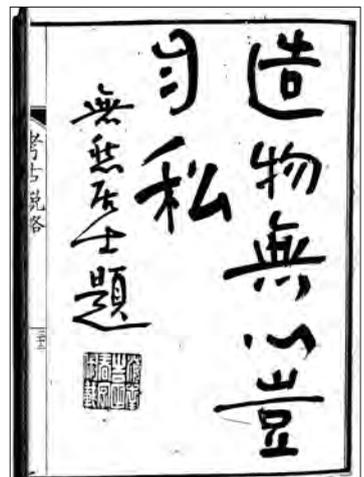


図5. 『考古説略』本文最終頁

中に著わすところに拠れば、「長崎ニ寓シ名誉ヲ当世ニ伝ヘラレタルホンシイボルト先生ノ次男」Henry von Sieboldとあるから、すなわち「小シーボルト」(1852～1908年)の意である(図3, 4)。

同書は「塙国ヘンリー・ホン・シーボルト著」(図2)と表紙にありながらも、本文記述の文体、格調、文語文的流暢さから推して、小シーボルト本人みずからの著作物とは考え難い。さりとて、邦訳某と明記されているわけではない。しかしながら「緒言」内容や、その文末尾にある「吉田正春誌」により、「学通和漢洋尤長詩文(学は和・漢・洋に通じ、尤も詩文に長ず)」(墓碑銘文より：大津 2007年)と伝わる、当時外務省御用掛の吉田正春による著文(訳文)とする可能性は確かに大である。再考の余地を残すが、同書本文末(三十三頁)に、「造物無心豈自私 無炁居士題」(図5)と、活字ではなく、手書きされたところにある落款中の終わりの2字「倣載」は吉田正春の字(あざな)であることを付記しておきたい(同前)。

この『考古説略』には、モースに関わる前出2書と同年（1879年）発行ながらそれらとは異なり、書籍の表題をはじめとして、文中には用語「考古学」が明確に見出される：

- ・「考古学ハ欧洲学課ノ一部ニシテ其課ヲ尚ホ二ツニ區別シ其一部ヲ事物考古学又其一部ヲ風俗考古学ト称ス考古ノ志アル人ノ居室ニ入レバ瓦片石塊壊壺鏝錢鏞鋒缺鐔ヨリ腐木碎材砂礫ノ如キ筵ニ充チタルアリ」（一頁）
- ・「シイホルト君斯ニ事物ノ源ニ就テ其嗜古ノ癖ヲ播伸セントシテ乃チ考古学ノ一部ヲ繙著セリ」（二頁）
- ・「是レ考古学者ノ為メニハ大ニ緊要ナルモノニシテ徒ニ是ノ器具ノ存在スルヲ知ル而已ナラズ」（三頁）
- ・「蓋シ口傳ニ至リテハ考古学者ト雖モ之ヲ確認スル能ハズ」（三頁）
- ・「石材ノ現形ヲ存在スルニ至ツテハ考古学者ニ対シ遙ニ確實ノ証拠ヲ与フベキモノナリ」（三頁）
- ・「此人獸ノ骨ハ已ニ石ニ化シタルモノニシテ考古学者ノ為メニ緊要ナル形蹟ヲ与ヘ」（十一頁）
- ・「茲ニ考古学ヲ研究スルニ根拠トナルベキ緊要ノ疑問アリ」（廿八頁）
- ・「此等ノ緊要ナル疑問ヲ説明セント欲セハ考古学研究ヲ以テ根拠トスベシ」（廿八頁）
- ・「真正ノ考古引證ノ諸家ノ為メニハ皆生活アリテ千萬ノ昔ヲ談話スルモノ、如ク」（廿九頁）
- ・「考古学ニ由テ右等ヲ研究スルトキハ其証憑ノ事物ハ日本国ニ於テ頗ル夥クアリテ」（廿九、三十頁）
- ・「依然トシテ泯滅セス腐敗セス嘘矣之ヲ説明スベキハ特リ考古学者ノ一要則トナシ得ベキナリ」（三十二頁）

この「小シーボルト」による日本考古学概説書とでもいふべき著書が³*Notes on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age*（以下《*Notes on Japanese Archaeology*》）であり、既出諸書と同年（1879年）発行である。たしかに表紙記載の発行年は大森貝塚に因むモース著書と同年とはいえ、《*Notes on Japanese Archaeology*》「Japanese Shell-heaps」章中のつぎの件は、僅かながらも先後関係を示唆しているようでもあり注意を要する：

- 《It is necessary here to state that the shell-heaps which I have taken as a basis for the following notes, are not the same as the one to which Prof. Morse has already drawn the attention of the public, but that they are situated about 10 miles farther to the south and 12 miles to the north;》（11頁）

たしかに、「欧文で書かれた斯学関係の著述の目的は、欧米人に読ませるためであるから」（清野 1925年）ということも関係してか、「小シーボルト」の《*Notes on Japanese Archaeology*》において、本文中に用語「archaeology」が見出される場合その殆どは「Archaeologist(s)」という用語形態をとる（以下の引用文中、語頭の大文字、小文字ならびに、archに続くaとeが合字か否かは原文のまま）：

- ・《That picture of early civilization in Europe and other parts of the world which is revealed

- to us by the labours of archæologists, and which, verified by every new discovery, becomes daily clearer and clearer to our view, is also to be met with here in Japan. 》 (Introduction, I 頁)
- ・《 I can only agree with the general idea of Japanese archæologists as regards their race, 》 (Introduction, II 頁)
 - ・《 When this mound was examined a few years ago by the Japanese archæologist Ninagawa, 》 (5 頁)
 - ・《 :- some Japanese archæologists are of opinion that at this period no burial system was observed at all ; 》 (6 頁)
 - ・《 Next to the stone implements, pottery no doubt affords to the Archaeologist a most interesting field for study. 》 (9 頁)
 - ・《 I distinguish amongst ancient pottery found different parts of Japan (and Japanese Archaeologists have also made the same division) three kinds, distinct in form and design as well as in material and mode of fabrication, 》 (9 頁)
 - ・《 Although it would be premature as yet to give any decided opinion with regard to the antiquity of the shell-heaps near Tokio, I am nevertheless of opinion – and therein agree with Japanese Archaeologists – that 》 (13頁)
 - ・《 , I agree with Japanese Archæologists in the opinion that these shell-heaps are not older than from fifteen hundred to two thousand years. 》 (13頁)
 - ・《 The drinking of blood out of a human skull is also recorded by Japanese archæologists as having been introduced from China; 》 (14頁)
 - ・《 Among further stone objects which are considered by Japanese archæologists to be of superior interest, are the so-called *Seki-Kento* or stone sword-guards (Knobs) 》 (16頁)
 - ・《 Japanese Archæologists are probably not wrong in asserting that China is the motherland of the bronze, 》 (16頁)
 - ・《 A few Japanese Archæologists even believe that the majority of the workmen whom Nomino Shikuné first employed were Coreans. 》 (18頁)

先駆的業績に遡って、例えば1879年という出版年を等しくところに「考古学」を確認すると、外来語archaeologyにはその訳出に当初より「考古学」と「古物学」の両法があったことを確認することができる。こんにちの用語法において後者「古物学」は殆ど「死語」と化した感があるものの、当初は語法・語義に峻別するところがあったのではないかと推察される。これについてはさらに関連資料を渉猟し検討すべきながら、先覚に拠って示唆的事例のいくつかをここにとりあげておきたい。

II. モース (1879年) およびシーボルト (1879年) 以降

ひとつは邦訳書『百科全書』(1884年)所収の「古物学」に見出される。訳者は柴田承桂(1850～1910年)である：

■アルケオロジエ [古物学]ト云ヘル語ハ、其原意十分明確ニシテ且ツ其含蓄スル所モ頗ル広大ナリト雖モ、近世ニ至ル迄ハ、其用ヲ限リテ、只希臘羅馬ノ技術ヲ論スル所ノ学科ノミニ命シタリ、然レトモ其真正ノ字義ハ、汎ク上古ノ事物ヲ講明スルノ意ヲ蘊有スルガ故ニ、現今ハ即チ是語ノ最モ広大ナル意義ニ因ツテ、之ヲ用キ、往昔ノ遺蹟遺物ニ憑拠シテ、上古ノ沿革史記ヲ演繹スル所ノ学科ヲ総称シテ、古物学ト呼做スルニ至レリ、

ここでは、archaeology について、それを本来的には古代ギリシア・ローマの「技術論」に限定される用語であるのに対し、「往昔ノ遺蹟遺物ニ憑拠シテ、上古ノ沿革史記ヲ演繹スル所ノ学科ヲ総称」(引用者傍点)としては「古物学」を用いるとしている。すなわち広義の意味での archaeology に「古物学」を当てはめている。

いまひとつは坪井正五郎(1863～1913年)の講演録中に注視すべきところがある。それは「東京人類学会満二十年記念演説」と題するものであり、同会の実質的創設者坪井による同会20年間の追想記である。ちなみに、「東京人類学会」創立は、前記邦訳書『百科全書』発刊と同年の1884年(明治17年)となっている。

坪井は当会創立時「東京大学理学部生物学生徒」であったのであるが、会創立の「近因」を次のように追想する：

■都合四人で動物採集の爲め能登地方へ行つた時、序でを以て種々の遺跡を調査し、種々の古物を拾得し、種々の土俗を観察したので、帰京の上は是等に付いての談話会を兼ね、広く古物遺跡風俗方言人種等に関する研究演説の寄り合ひを催さうと話し合つたのに在る

さらに会創立の「遠因の一」として、1879年(明治12年)開始の「夜話会」が挙げられ、これが当時「古物遺跡に関する話しをする所」のようになった、と追想している。確かに、会ごとの演題に「考古雑話」、「考古説」、「考古談」が頻出する：

- ・「(1883年、引用者注)三月開会第五十九会での演題は、考古雑話(坪井正五郎)(以下省略、引用者注)」
- ・「(同前)四月開会第六十会での演題は、考古説(坪井)(以下省略、引用者注)」
- ・「(同前)九月開会第六十四会での演題は、考古談(坪井)、考古談(白井)他に三題。」
- ・「(同前)十一月開会第六十五会での演題は、考古談(坪井)、考古談(白井)他に一題。」
- ・「(同前)十二月開会第六十六会での演題は、考古談(坪井)、考古談(白井)。」
- ・「(1884年、引用者注)一月開会第六十七会での演題は、考古談(坪井)。(以下省略、引用者注)」

加えて、「遠因の二」として私家版雑誌(1877[明治10]年よりの「月曜雑誌」に始まり、その後「毎週雑誌」、「小梧雑誌」と改名)が言及され、その収録中には例えば下記のような「古物」記載が見

出される：

- ・「古物の説第一回（坪井正五郎）と上代考（同）」：1882（明治15）年6月編輯第50号
- ・「古物の説第二回（坪井）」：同9月編輯第51号
- ・「琉球風俗（山口鋭之助）、日本古物雜記（シーボルト原著）」：同年10月編輯第52号
- ・「古物遺跡に関する太政官布達を読む（福家梅太郎）」：同年11月編輯第54号
- ・「札幌近傍古物遺跡（渡瀬庄三郎）」：同上

また、この追想に続けて、「学会の発起者白井、佐藤、福屋の三氏及び私の四人は決して古物遺跡に関して述べたり書いたり計りして居たのでは有りません」とことわりつつ実地踏査した貝塚や古墳の「古物遺跡」を列記している。この「古物遺跡」踏査を実施した、ということに関して坪井はここで「考古学」に言及しつつ、学会名を「東京人類学」とし、なぜ「考古学」を使わなかったのか、について述べている：

「夜話会、小椋雑誌、の演説記事、及び我々同志者の実地調査と云ふものは殆ど古物遺跡関係の事で持ち切りと云ふ姿で有つたのに我々が新設学会を考古学の会とせず、人類学の会としたのは如何なる訳か、或は此点に付いて疑ひを挟む人が有るかも知れず、或は又考古学と云つても人類学と云つても大した違ひは無いと云ふ様に考へる人が無いとも限りませんから、念の爲め学会命名の由来を申しませう。我々が手にした所の材料の多くは如何にも考古学に於て扱ふやうなもので有りました。併しながら之が研究に付いて我々の懐いた希望は単に古物遺跡に基いて昔の有様を知ると云ふに止まらず、之を遺した種族の何者たるか、其現存種族との関係如何をも明かに仕度いと云ふに在つたので、我々の仕事は古物遺跡を中心として人種の事を参考に供したのでは無く、人種を中心とした調べの手掛かりに古物遺跡を用ゐたのであります。我々は歴史以前、歴史初期及び歴史有つてから此方を通じての古物遺跡研究をば総括するところの考古学の部分として斯かる仕事をしたのでは無く、體質言語風俗種々の方面からして人類の本質現状由来を調べる所の人類学の部分として採集研究に従事したので有ります。（中略、引用者）我々は考古学の会たるべきものに人類学の名を負はせたのではありません、古物遺跡関係事項が勝つて居たとは云ふものゝ、希望に於ても、事実に於ても、人類研究の会たるべきもので有つたので、其会合に最も適切と思はれる名を付けたので有ります。」（坪井 1904年）。

すなわち、坪井にとって考古学は「歴史以前、歴史初期及び歴史有つてから此方を通じての古物遺跡研究をば総括する」あるいは古物遺跡に基いて昔の有様を知ることである、と明言している。その来歴となると、前記「遠因」、「近因」に拠れば、坪井およびその周囲にとって1883（明治16）年までは遡り得るのである。すなわち、モースやシーボルトによる「Archaeology」との時間差は僅少と見てよいであろう。先後関係から推して、坪井が1877年（明治10年）に「大学予備門内の出来事を書き集めて之に随筆様のものを記し添へた」という「月曜雑誌」を検討すべきことが課題としてなお残ることを現段階では備忘としておきたい。

Ⅲ. 黒川真頼と『上代石器考』（1879年）

用語法「考古学」、「古物学」等々の開始・変遷を勘案する際、外来語来歴にその基を探るとともに、日本在来の遺物・遺跡への対峙法は看過できないであろう。かのモースをして「日本ニハ好古家ノ数或ハ他国ヨリ多カラント」《there is no other country in the world where so great a number of gentleman interested in Archæology can be found as in Japan.》あるいは「東京ニ於テモ有志ノ士合社シ期日ヲ定メ相会シテ古代ノ事物ヲ購究シ且ツ一ニノ古学家ハ既ニ希世ノ古器石具彫鐫物ヲ精図編纂シテ世ニ公ニスト」《With the existence of an Archæological Society in Tokio, consisting exclusively of Japanese, who hold their meetings regularly, and the fact that there have already been a number of works published by native archæologists who have figured with more or less accuracy the stone implements, ancient vessels, inscriptions and the like,》と感服せしめ、「有名ノ古物家蝸川氏ニ聞ク所ニ拠レハ」《Mr. Ninagawa, the distinguished antiquarian, informs me》、と具体的人名が挙げられたほどであるからである。

いまモースおよびシーボルトによる具体的業績の最初年すなわち「1879（明治12年）」に再度注視すると、この同年に『上代石器考』が「内務省博物館」より発行されたことが見出される。著者黒川真頼（1829～1906年）は、かの『工芸志料』（1877年）の編纂者でもある。「前田 1974年」に準拠すれば、黒川は『上代石器考』を著わした当時、東京大学（法学部、文学部）の講師の職にあった。したがってモースおよびシーボルトらの活躍の場との物理的距離は大きくなかったはずであり、あらためて黒川の年譜を確認すると、1877（明治10）年には内務省へ転じ、博物館史伝課長心得となり、パリ博覧会開設に当たったことが注視される。この点、「原田他 1996年」によれば、前記小シーボルトもまた「ウィーン万国博覧会（1873年）の日本国内委員会連絡員（前田 1974年）を務めたという類似の職歴を持ち、あるいはここに何らかの接点を推察してもよいのではなかろうか、とも思えるのである。

『上代石器考』の「上代」とは、著者黒川によれば、「神武天皇ヨリ皇極天皇マデ」（黒川 1879年）であり、神武天皇以前の「太古」と画期されている。そして「本邦ニ石器ヲ用キルコトノ、太古ヨリ起リシコトハ論ナシ、而レドモ上古ニ至テモ仍^{ナホ}コレヲ用キタリ」とした。本書は、「古事記」に関連しての器物記載により「石剣」、「石刀」、「石鏃」等を論説し、一見、江戸時代の木内 石亭著『雲根志』（1773, 1779, 1801年）を想起させるものの、これと大いに異なる前提があるようである：

■西洋諸国ノ伝説ニハ、石世時代トイフコトアリテ外邦ノ上古ハ銅鉄ヲ以テ器財ヲ造ルコトヲ未ダ發明セザリシ已前ハ、石ヲ以テ造リテ日用ニ供セリ、而シテ後銅ヲ以テ造リ、而シテ後又鉄ヲ以テ造ルコトヲ知リテ、漸ニ便利ヲ得タリト位ヘレド、本邦ニ於テハ、太古ヨリ斯ノ如キ伝説ハ、絶エテアルコト無クシテ、唯石ニテモ造リ、銅鉄ニテモ造リテ、以テ其ノ用ニ便ジタリト云ヘリ、（後略、引用者注）

すなわちこの箇所が、モースの「浅草井生村楼」講演（1878年6月30日）中に語られたと記録の

伝わる、「三時期区分法」についての言と相通じるからである。

IV. まとめにかえて

明治期初年にモースが大森貝塚を発掘調査、「Archaeology」の成果として公刊し、かつ「進化論」共々あたらしい理論・学問を「土中より出現せる古器により前世界人種のことを考覈する学問」と日本人に披露した時、モースの語ったそれを「考古学」と表現することはなかった。しかし、シーボルトによる同時期の概説書には用語「考古学」が明解に使われている。我々が接する今日的意味合いでの用語「考古学」の発現年として、その後明治期の事例をいくつか探査してみると、明治12(1879)年を確かに見出し得る。同時に、それまで通りの「古物」・「古物学」もまた確かな使用が認められる。明治初期、先学たちがどのような定義のもとに用語「考古学」、「古物学」等があるいは使い分けたのかその明確な基準を未だ見出せない。事典項目「アルケオロジー」において「アルケオロジー [古物学] ト云ヘル語ハ、」と紹介する事例も確かにあるし(柴田承桂訳『百科全書』所収「古物学」の項)、同時に、内実は「考古学」、「古物学」とおおいに相共通するにもかかわらず、「考古学」と峻別して「人類学」とする坪井の見地もあった。

このたびの課題は、我々がこんにちの「考古学」に抱くあるいは期待するところから云えば、あるいは瑣末すぎることかもしれない。しかしながら、かつて角田文衛(1913～2008年)がいみじくも指摘したこととも深く関わる:「考古学とはどのような学問であるかといった問いは、考古学者にとっては極めて初歩的で自明な問題のようにみえる。しかしこの一見して平易な設問は、考古学者にとって落穴なのであって、(中略、引用者注)この平易に見える問題を蔑にして研究を進めて行くと、方法論的に迷妄に陥るからである」(角田 1986年)

角田は「考古学」の概念を歴史的に四期に区分する:

- ・第一期(紀元前4世紀前半プラトーンから紀元後1世紀まで):古典ギリシア語のいう「考古学」は「太古の物語」、「古代の歴史」、「古代」の意味に用いられる
- ・第二期(17世紀中頃から18世紀なかばまで):「古代」、「古事」、「古代の探求」の意味で用いられる
- ・第三期(18世紀中頃から20世紀中頃まで):「美術品、特にギリシア・ローマのそれを通じて古典文化の様相を研究する学とみなす見解と、遺物・遺跡によって人間の過去を研究する学と見る見解との併立が顕著であった。前者が先史学ないし原史学の存在を認めるに対して、後者はそれに対応するものとして先史考古学を設定したのであった」(角田 1986年、41頁)
- ・第四期(20世紀なかばから今日にいたるまで):「考古学」の概念規定の主流が、『遺物遺跡によって人間の過去を究明する学』と定義するとなり、これと異質的に併立する人類学の一部門とみる見解がアメリカなどに見られることである。考古学をもってギリシア・ローマの古典文化をその遺物遺跡によって研究する学問というフリスティアン・ハイネ以来の伝統的な定義は、殆

ど影を潜めるに至った。」(角田 1986年、41頁)

そして、角田は「考古学なる語の概念に関する不統一の根元がarchaeologyのもつ曖昧さに由来」(同前、45頁)し、この語の由来するギリシア語には「『遺物遺跡によって』という意味はなく、それは漠然と『古代の物語』、『古代史』、『古事学』と訳されるような字義しか帯びていない」のであって(同前、44頁)、「所謂『考古学』は、その永い研究史が自ら語る通り、古代遺物学と呼ぶべき」であり、「所謂『考古学』とは、言葉の正しい意味での古代遺物学のこと」と結論している(同前、49頁)

角田論「考古学の概念」は当該課題の指南書としては、その内包する時代、地域、課題細目が極めて広汎膨大であり、もとより筆者の理解・咀嚼のいまだ及ぶべきところではない。このたびの煩瑣な拙論は結果的に、角田の云う「第三期」に相当する我が国の様相のうち、そのほんの一端について資料的論拠を再考するに留まってしまった。恐縮ながら角田論より敢えてここに借用すれば、その要所は下記の箇所に見出されるのである：

「明治の初年、英米の諸文化が滔々と日本に流入した時、英学者たちはArchaeologyを如何に訳すべきかの問題に遭遇した。明治五年、Websterの辞書が和訳され、『英和对訳辞書』の名で出た時、それは『古事学』と言う原義に最も近い語で訳された。また明治十年、柴田承桂博士がチェンバースの百科辞典のArchaeologyの項を邦訳された時、博士がこれを『古物学』と訳したことは、初めに述べた通りである。ついで明治十二年に出たジーボルトの『考古説略』では、『考古学』の語は、Archäologieの訳語として用いられている。有名な『大森貝塚古物篇』(明治十二年)では『古物学』の語、明治十五年十月二日の『太政官第五十八号布達』では『考古学』の語がそれぞれ使用されている。Archaeology, Archäologieを『古物学』と訳すのは『考古説略』の撰述に協力した吉田正春(一八五一～一九二一)の考案と認められる」(角田 1986年、29, 30頁)。

【参考文献】

- 大津忠彦、2007年、「明治期先覚者吉田正春とその事績—「考古学」および「西アジア」の視点より」、『人間文化研究所年報』第18号、筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所。
- 清野謙次、1925年、『日本原人の研究』、岡書院。
- 黒川真頼、1879年、『上代石器考』、内務省博物局。
- 近藤義郎、佐原真(編訳)、1983年、『大森貝塚一付 関連史料—』(岩波文庫 33-432-1)、岩波書店。
- 角田文衛、1986年、「考古学の概念」、『角田文衛著作集 第一巻 古代学の方法』、宝蔵館。
- 坪井正五郎、1904年、「東京人類学会満二十年記念演説」、『東京人類学会雑誌』第223号、東京人類学会。
- 西岡秀夫(編)、1967年、『大森貝塚』、大森貝塚保存会、中央公論美術出版。
- 原田信夫、H.スパンシチ、J.クライナー(訳注)、1996年、『小シーボルト蝦夷見聞記』(東洋文庫 597)、平凡社。
- 平田健、2008年、「H.v.シーボルト著『考古説略』と明治期の日本考古学」、『明治大学図書館紀要』12号。
- 前田泰次(校注)、1974年、『増訂 工芸志料』(東洋文庫254)、平凡社。

本論中においては敬称を敢えて省略し、引用文において、旧字および異体字を、原典と違って混用した

ところがあることをお断り致します。なお、掲載図版は、出典を特に記したものの以外は、入手し得た原著の複写物を参照しつつ、国立国会図書館近代デジタルライブラリーが公開するデジタル画像を利用致しました。

(おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授)

